

3. 定点把握対象感染症患者報告状況(週報)

(1) 過去5年間の報告状況

疾患名	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年
インフルエンザ	1,467	5,686	11,784	8,409	9,668
RS ウイルス感染症	1,604	1,320	1,302	1,861	1,838
咽頭結膜熱	185	458	490	285	582
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	652	1,449	1,807	1,121	894
感染性胃腸炎	8,997	7,791	9,263	8,820	7,894
水痘	1,639	1,612	1,765	1,101	889
手足口病	1,000	2,819	151	1,574	184
伝染性紅斑	33	729	448	19	47
突発性発しん	703	743	1,037	959	934
百日咳	18	32	19	10	25
ヘルパンギーナ	1,423	1,216	648	1,056	911
流行性耳下腺炎	1,444	1,777	720	193	51
急性出血性結膜炎	2	—	1	1	—
流行性角結膜炎	31	19	21	22	15
細菌性髄膜炎	10	5	2	3	1
無菌性髄膜炎	2	11	9	9	1
マイコプラズマ肺炎	43	88	55	17	26
クラミジア肺炎	1	—	—	3	—
感染性胃腸炎(ロタウイルス) ¹⁾				1	32

¹⁾ 平成 25 年より定点把握対象感染症に指定された。

(2) 各疾病の報告状況

① インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

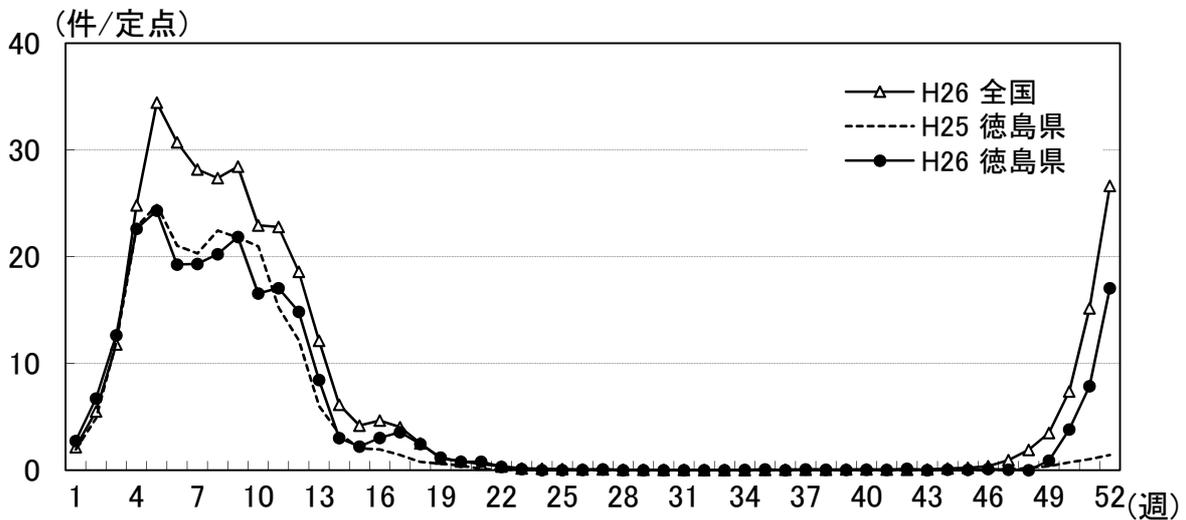
年間報告数は9,668件であり、前年（8,409件）よりやや増加した。

本年の流行は、前年とほぼ同様の流行パターンを示した。前期は、前年の第51週より流行期に入り、報告数は第1週より急増し、第5週にピーク（24.3件/定点）を迎えた後、第9週（21.8件/定点）まで高い状態が続き、以後減少した。ピークの高さ（24.5件/定点）、警報・注意報の発令期間（第3～13週）とも前年と同様であった。

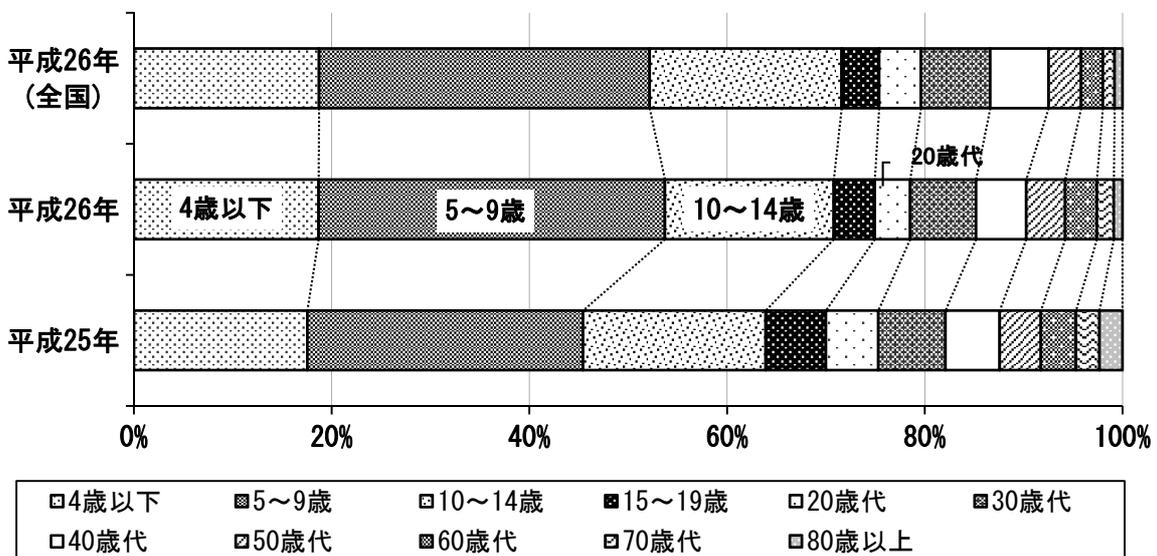
後期は、前年より約2週間遅い第49週より報告数が上昇し始め、流行開始の目安とされる1.0件/定点を第50週（3.82件/定点）に超え、翌年の流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4歳以下18.7%、5～9歳35.0%、10～14歳17.1%、15～19歳4.1%、20歳以上25.1%であり、前年と比較して5～9歳の割合が高く、20歳以上の割合がやや減少していた。

インフルエンザの週別患者報告状況



インフルエンザの年齢層別報告数



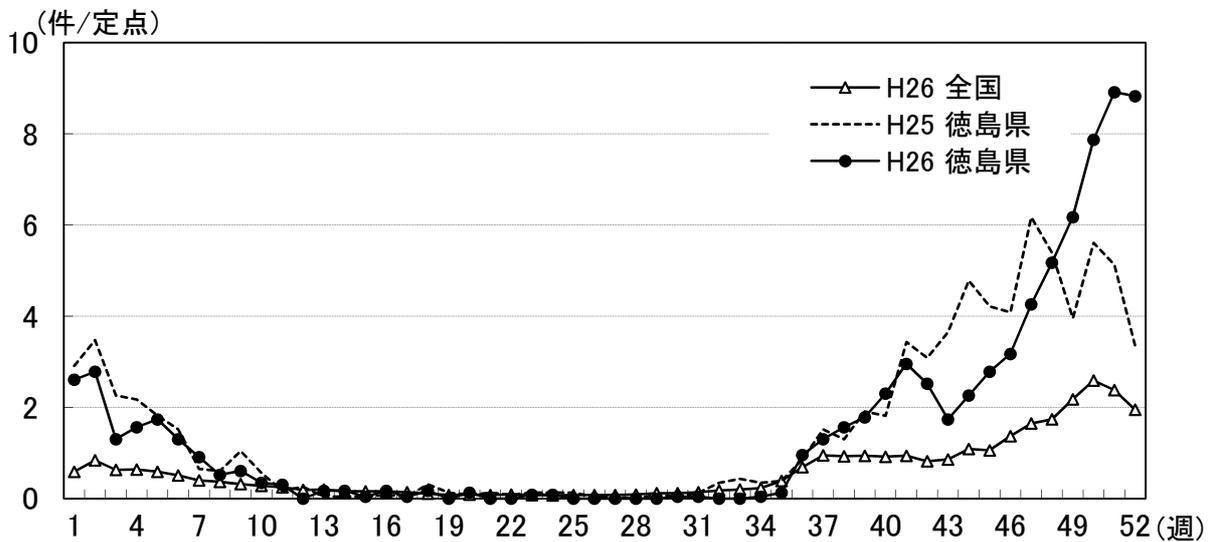
② RS ウイルス感染症

年間報告数は1,838件と、過去5年間で最も多く報告された前年(1,861件)とほぼ同数となり、2年続けての大きな流行が見られた。

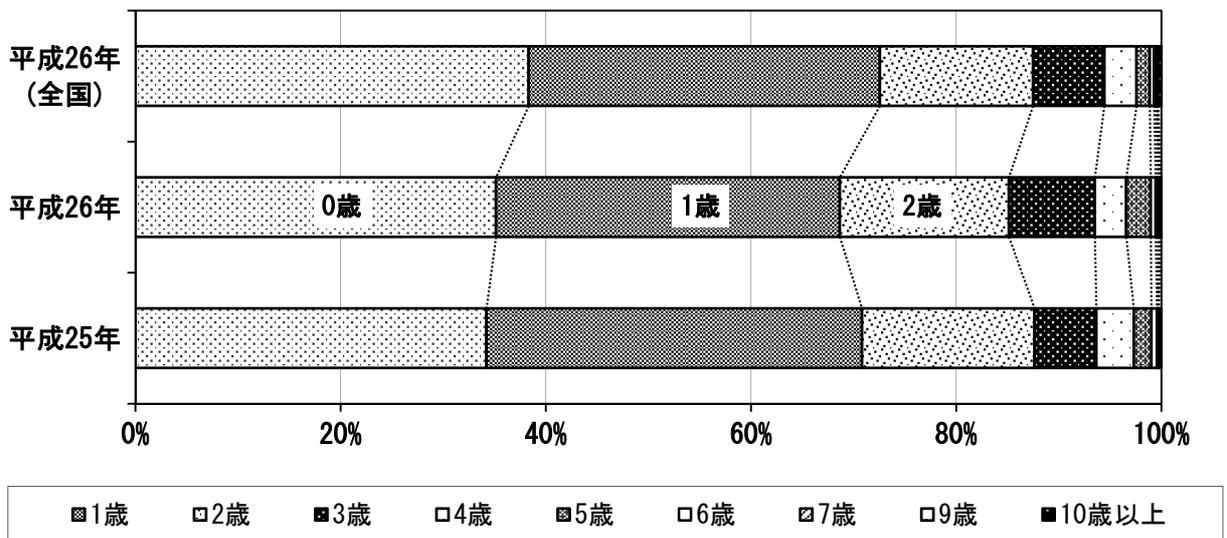
前期は、前年の後期流行を継続したまま、第11週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行も、前年同様、例年より約2ヶ月早い8月下旬より報告数が増加し始め、第41週に1回目のピーク(3.0件/定点)が見られたのち、第44週より急増し、第51週に2回目のピーク(8.9件/定点)を迎えるなど流行期間が長く、全国平均を大きく上回る報告数のまま、翌シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、0歳35.1%、1歳33.5%、2歳16.5%、3歳以上8.4%であり、前年と同様に2歳以下の乳幼児の割合が約90%を占めた。

RS ウイルス感染症の週別患者報告状況



RS ウイルス感染症の年齢層別報告数



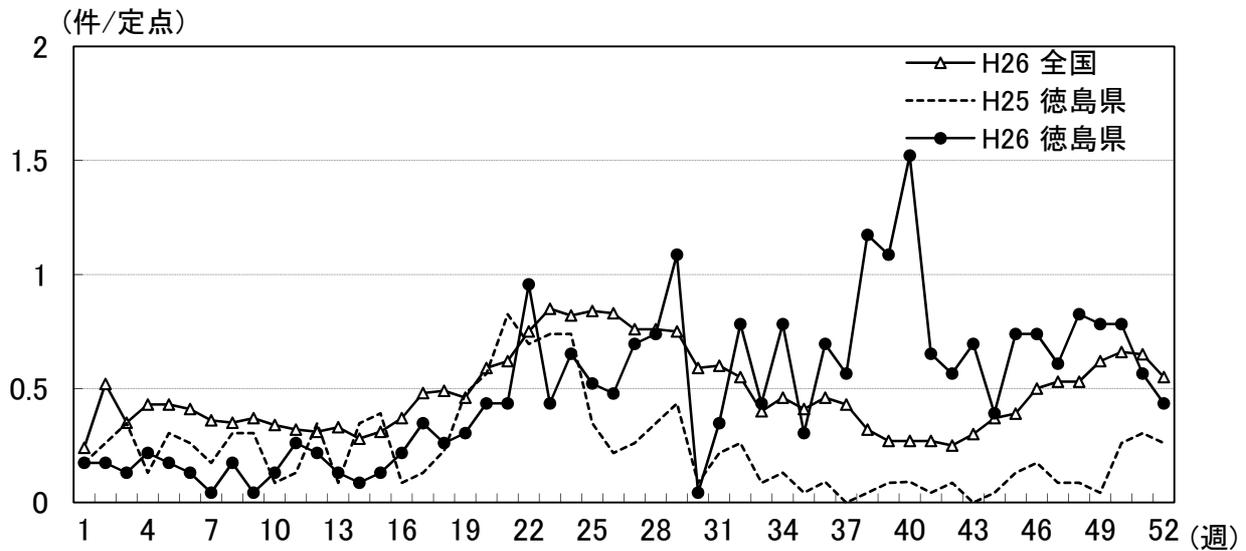
③ 咽頭結膜熱

年間報告数は582件と、前年(285件)より2倍に増加し、過去5年間で最も多い報告数となった。

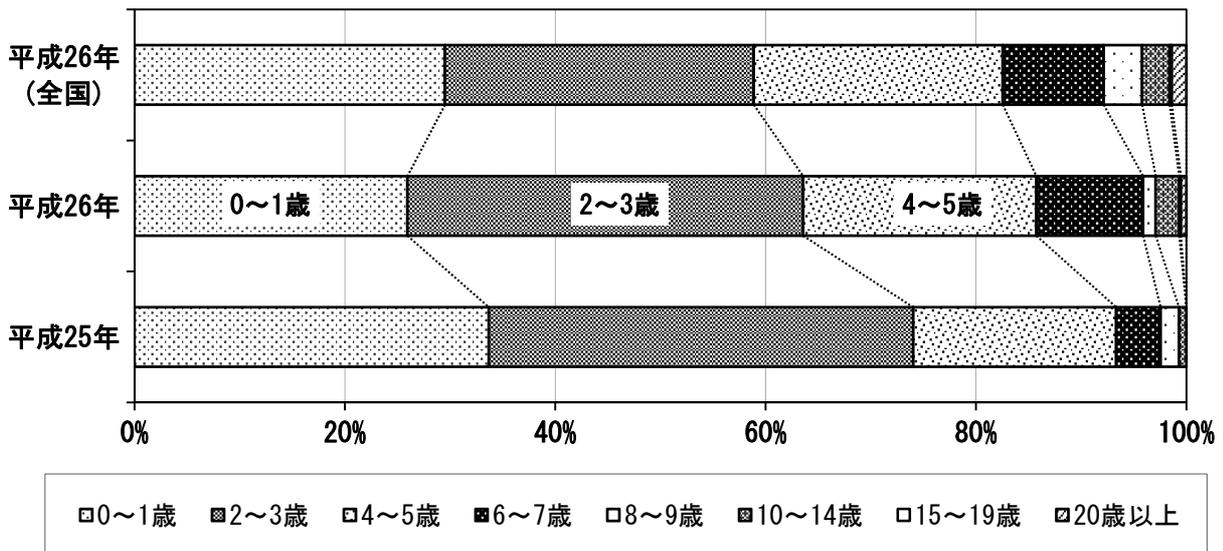
本疾患は、一般に4月ごろから増加しはじめ7～8月にピークを示し、秋にも小規模な流行がみられる年もあるとされる。本年は、第16週頃より報告数がゆるやかに増加し、やや高い状態で推移した後急増し、第40週にピーク(1.52件/定点)をつけた。

年齢層別報告数は、1歳以下25.9%、2～3歳37.6%、4～5歳22.2%、6～7歳10.1%、8歳以上4.2%であり、5歳以下が約86%を占めた。

咽頭結膜熱の週別患者報告状況



咽頭結膜熱の年齢層別報告数



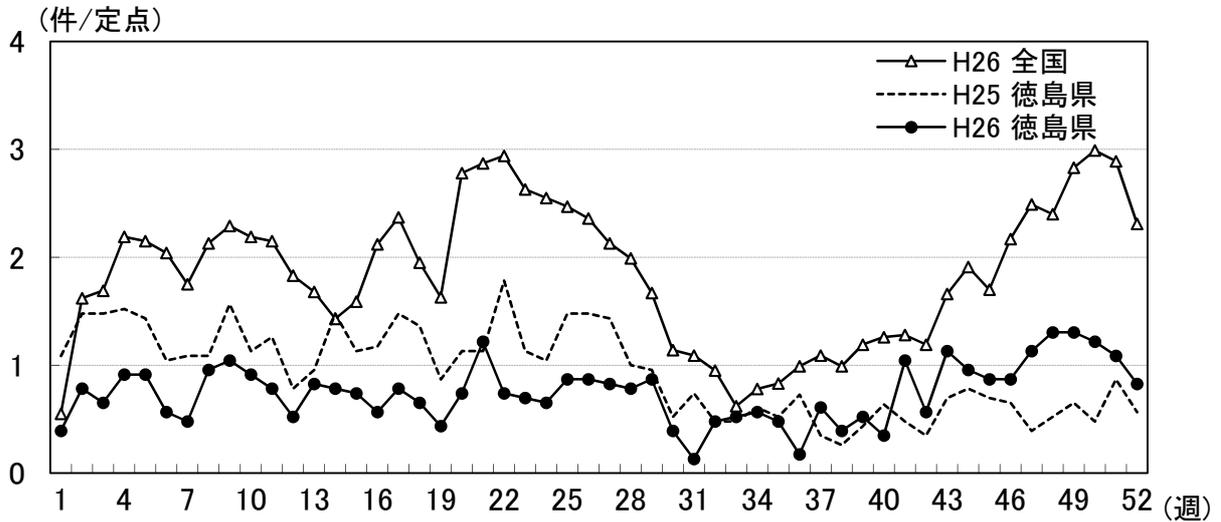
④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は894件と、過去10年間では最も多い報告数となった平成24年(1,807件)の約1/2の報告数となった。

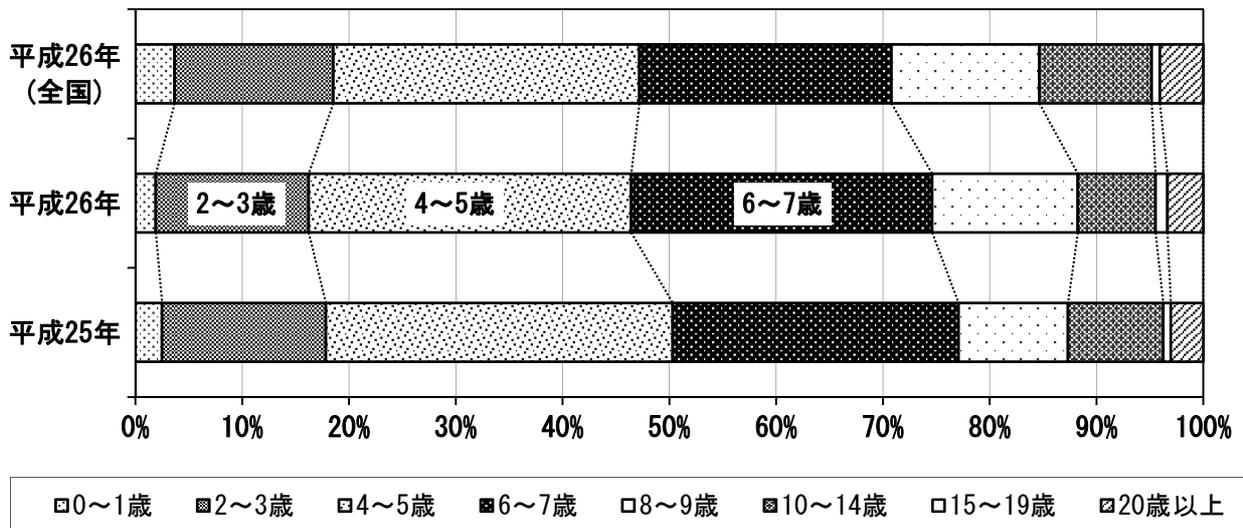
本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年も前年同様、はっきりしたピークは見られず、初夏である第21週頃と、晩秋の47～51週にかけてやや高かったが、年間を通じて大きな増減はなく推移した。

本疾患は、いずれの年齢層からも報告されるが、学童期小児からの報告が多いとされる。年齢層別の報告数は0～1歳1.9%、2～3歳14.3%、4～5歳30.2%、6～7歳28.2%、8～9歳13.6%、10～14歳7.3%、15歳以上4.5%と、学童期小児の割合が高かった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別患者報告状況



A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢層別報告数



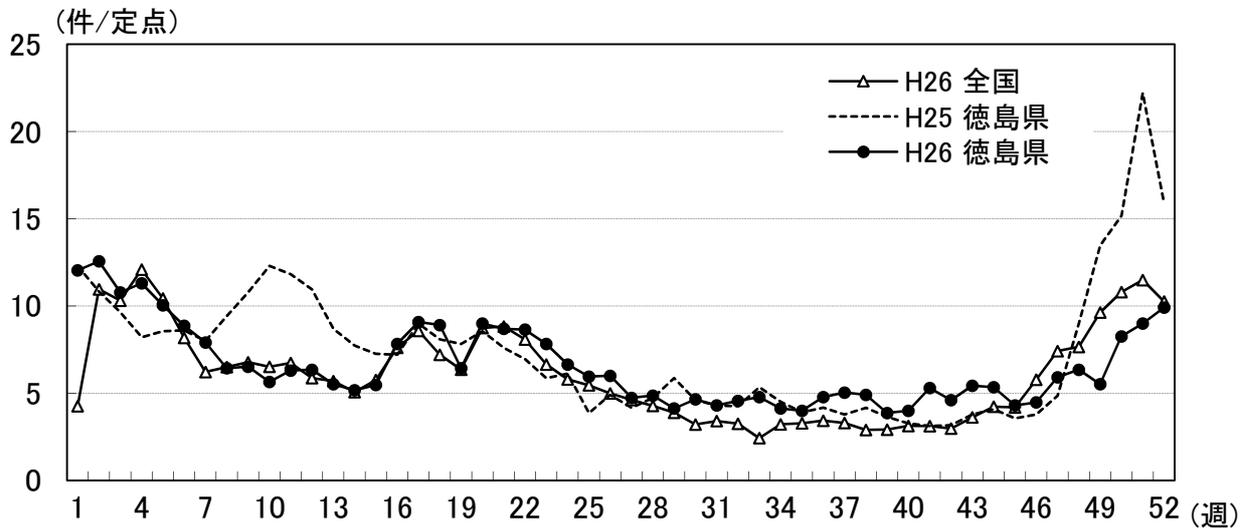
⑤ 感染性胃腸炎

年間報告数は7,894件、前年(8,820件)よりやや減少した。本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め12月頃に一度ピークができた後、春にもう一つなだらかなピークを示した後、夏から秋に向けて緩やかに減少するとされる。

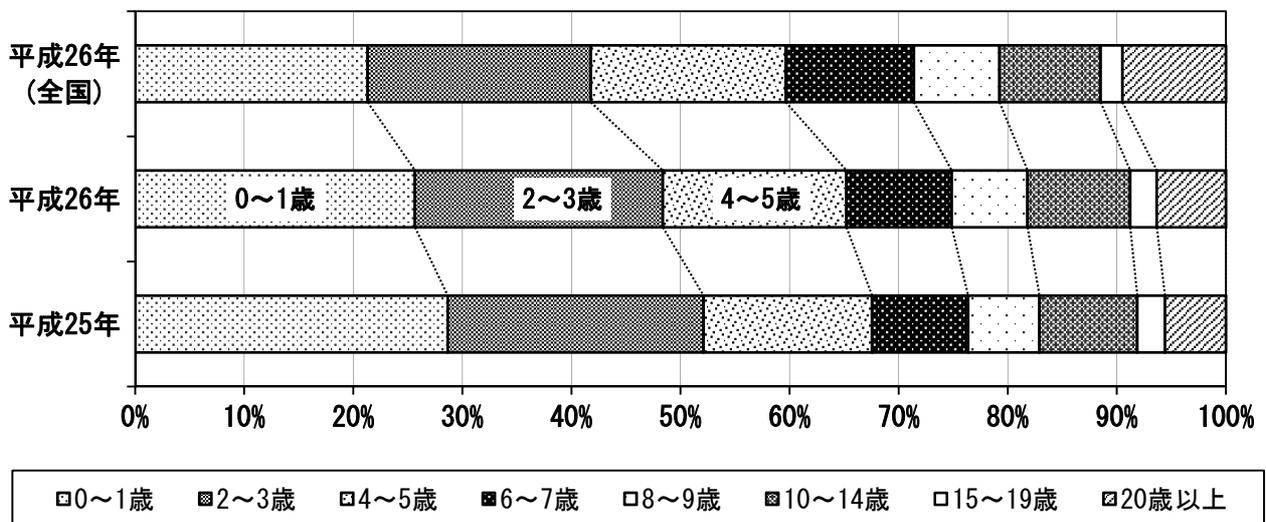
本年の前期流行は、前年の第51週にピーク(22.2件/定点)を示し報告数の高いまま越年した。その後、減少傾向を示したものの春頃(第15週)より再び増加傾向となり、初夏(第23週)を迎える頃までやや高い状態がみられたが、以後、緩やかに減少し報告数3~5件/定点前後で推移した。後期は11月中旬(第46週)から増加傾向を示したものの緩やかであり、前年のような大きなピークは見られないまま越年した。

年齢層別報告数は、0~1歳25.7%、2~3歳22.7%、4~5歳16.8%、6~7歳9.7%、8~9歳6.9%、10~14歳9.4%、15歳以上8.8%と7歳以下の乳幼児が全体の約75%を占めていた。

感染性胃腸炎の週別患者報告状況



感染性胃腸炎の年齢層別報告数



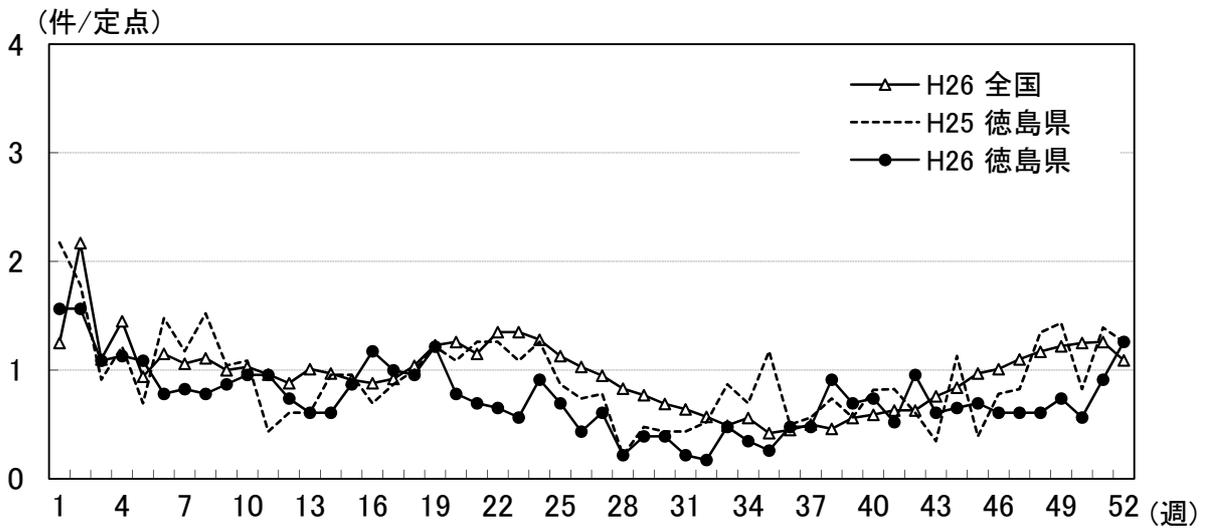
⑥ 水痘

年間報告数は889件であり、2年続けて前年（1,101件）から減少し、過去5年間で最も少ない報告数であった。

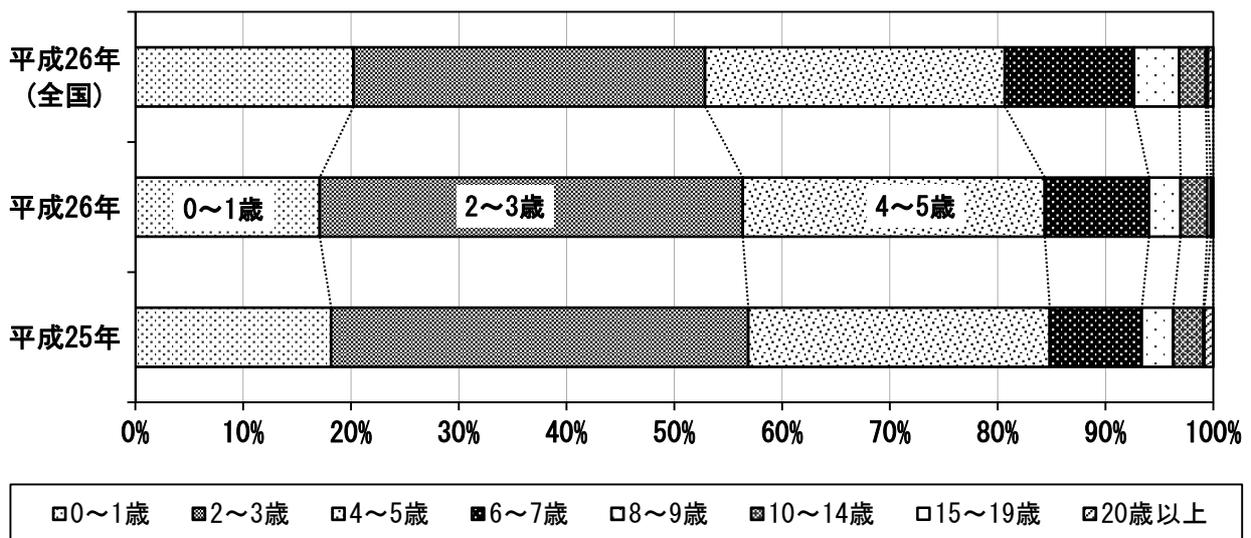
本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされている。本年も年間を通して報告され、冬から春にかけての報告数がやや高かったものの、大きなピークも見られず、年間を通じ低い報告数（0.2～1.5件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳17.1%、2～3歳39.3%、4～5歳28.0%、6歳以上15.6%と5歳以下の報告が全体の約85%を占めた。

水痘の週別患者報告状況



水痘の年齢層別報告数



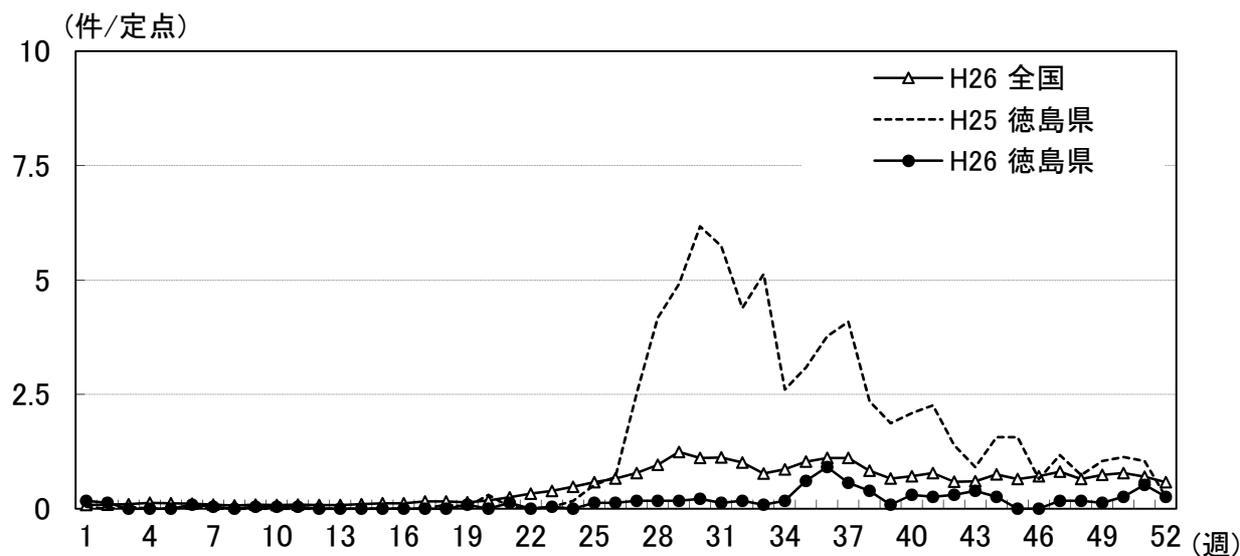
⑦ 手足口病

年間報告数は184件と、前年(1,574件)と比べ大きく減少した。

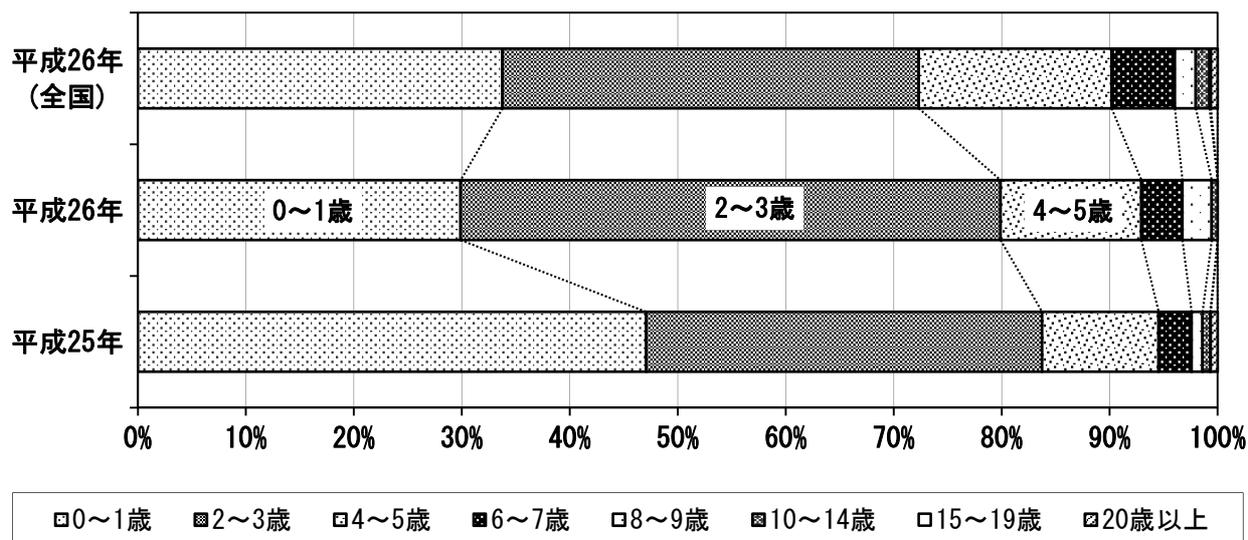
本年は年間を通して低く推移し、季節的な変動は見られず、最も報告数の高かった第38週でも定点当たりの報告数は0.91件であった。

年齢層別報告数は、0～1歳29.9%、2～3歳50.0%、4～5歳13.0%、6歳以上7.0%と3歳以下の報告が約80%、5歳以下では全体の約93%を占めており、前年と同様の傾向であった。

手足口病の週別患者報告状況



手足口病の年齢層別報告数



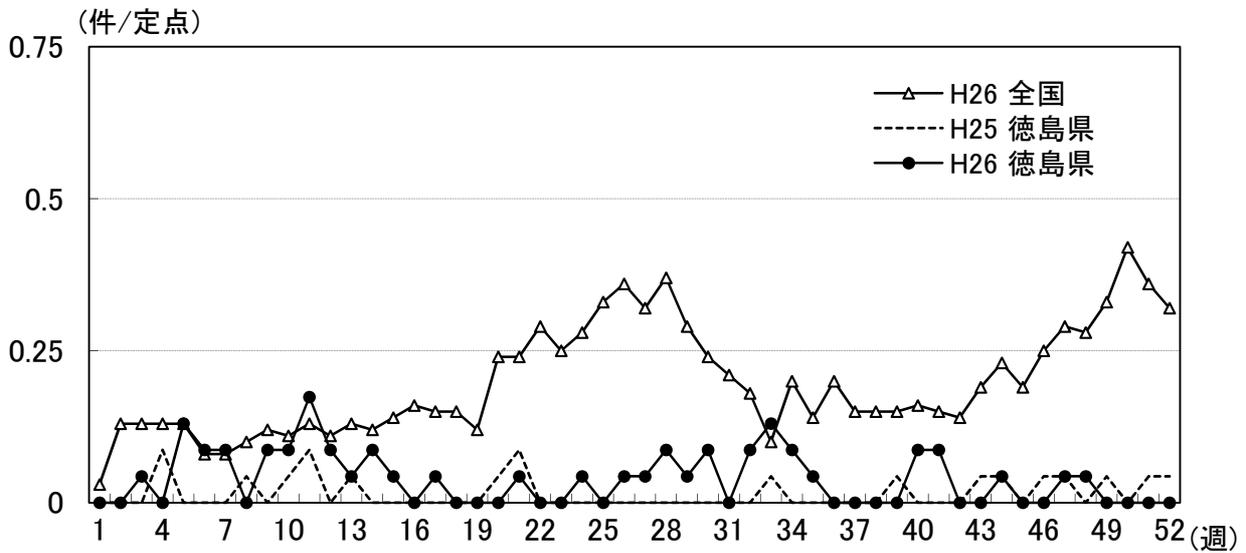
⑧ 伝染性紅斑

年間報告数は47件と前年(19件)に続き少なかった。過去5年間をみると、平成23、24年はそれぞれ729件、448件報告されているのに対し、流行のなかった年は流行の見られた年の約1/10(50件以下)と、年毎により報告数の変化が大きい。

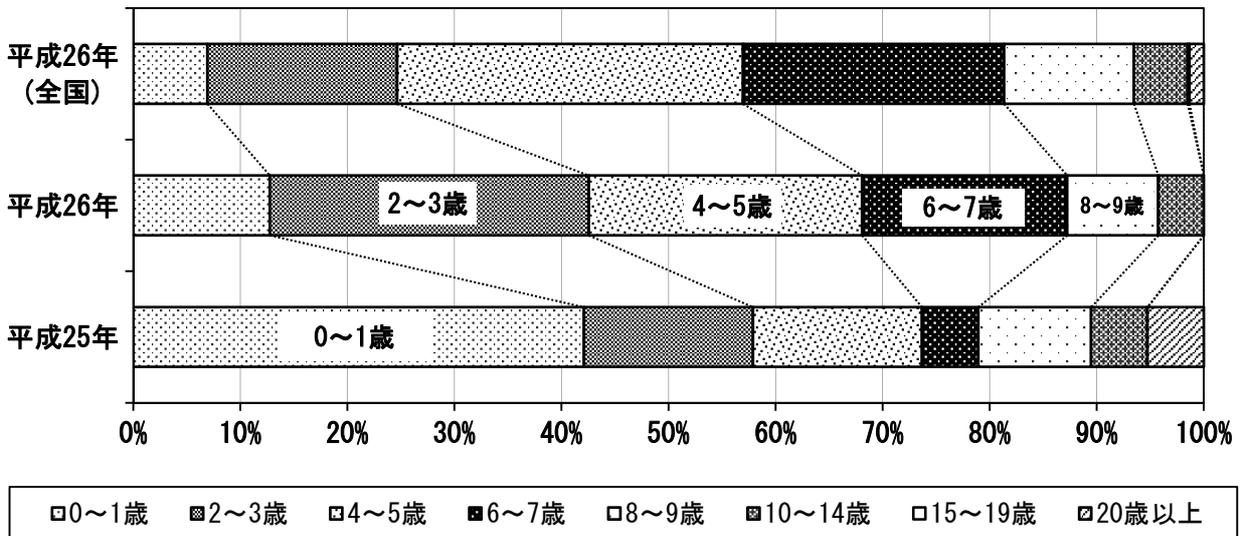
本年は年間を通じて少なく推移し、最も多かった第11週においても、定点あたりの報告数は0.17件であった。

年齢層別報告数では、0～1歳12.8%、2～3歳29.8%、4～5歳25.5%、6～7歳19.1%、8～9歳8.5%、10歳以上4.3%と、7歳未満が全体の約90%を占めた。

伝染性紅斑の週別患者報告状況



伝染性紅斑の年齢層別報告数



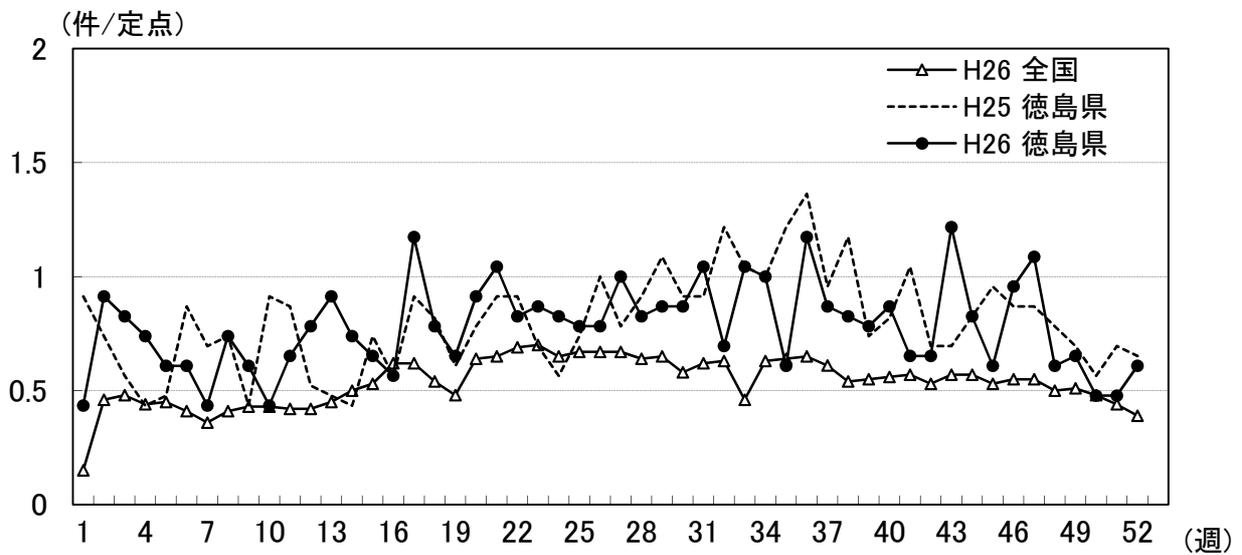
⑨ 突発性発しん

年間報告数は934件であり、前年（959件）とほぼ同数であった。過去5年間をみても年間報告数に差は少なく、毎年約700～1,000件で推移している。

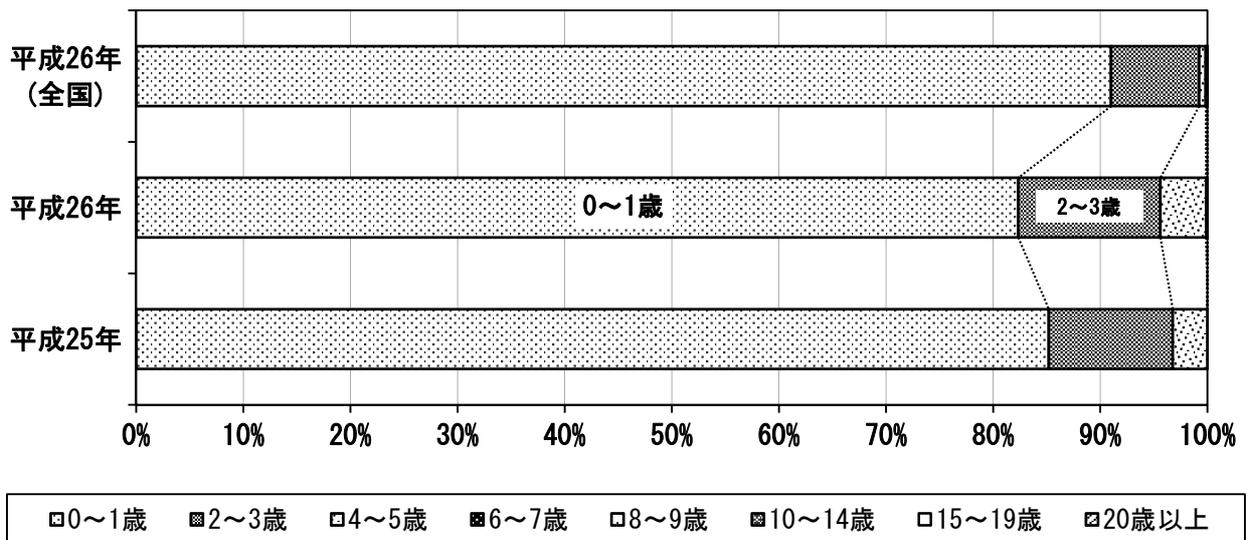
一般に本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年も例年と同様に季節的変動は見られず、報告数は一定の範囲内（0.4～1.2件/定点）で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳82.3%、2～3歳13.3%、4～5歳4.3%と、例年同様、1歳以下が最も多く報告された。

突発性発しんの週別患者報告状況



突発性発しんの年齢層別報告数

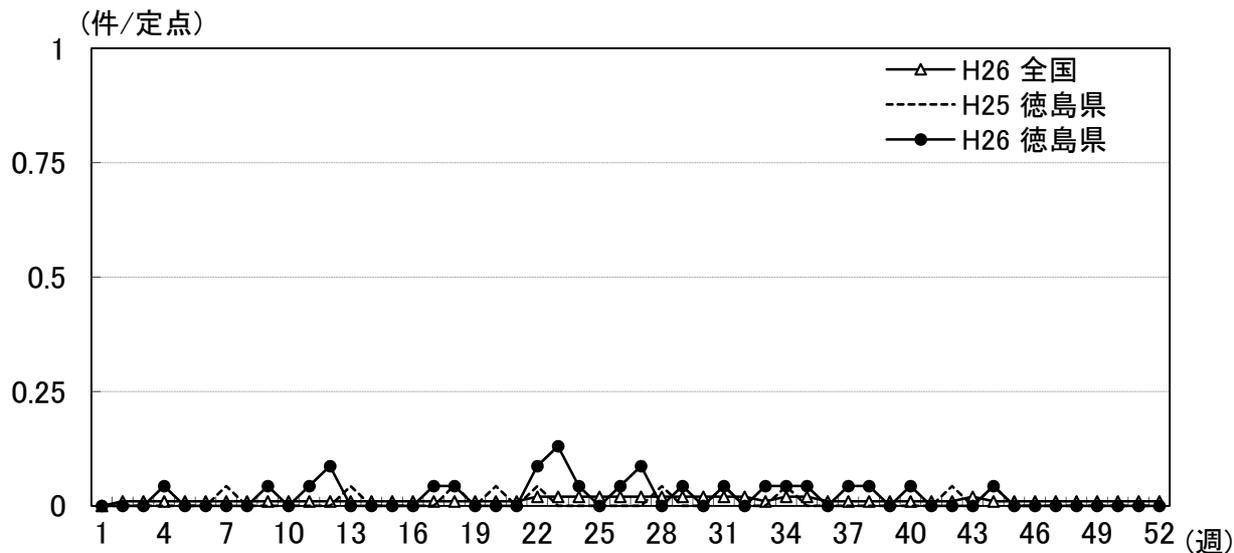


⑩ 百日咳

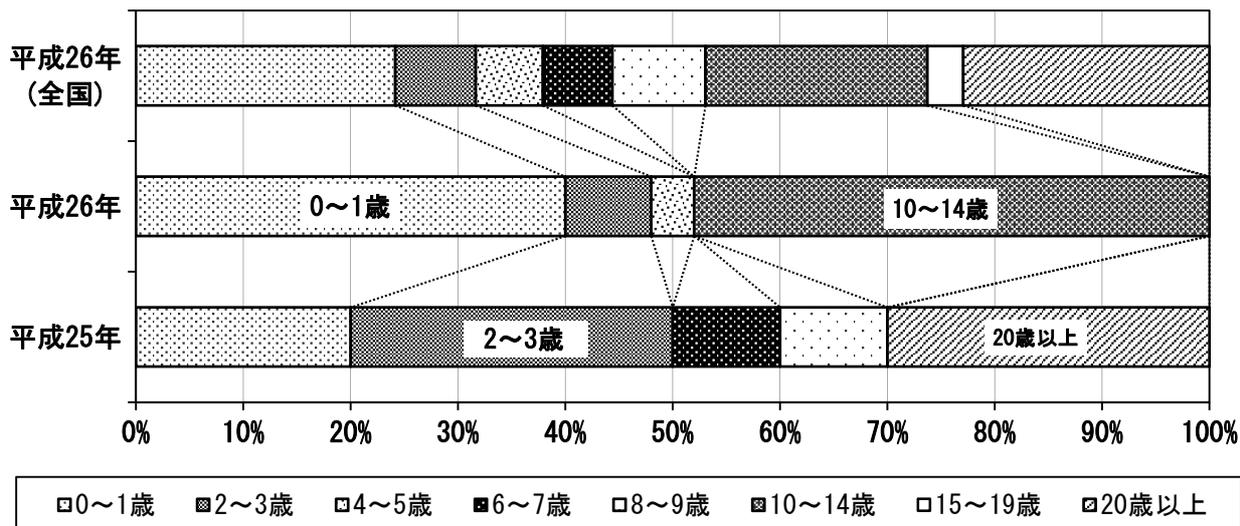
年間報告数は25件であり、前年(10件)から増加した。過去5年間の報告数は、10~32件で推移している。本年は、3月及び6~7月に報告数の増加が見られた。

年齢層別報告数では、0~1歳40.0%、2~3歳8.0%、4~5歳4.0%、10~14歳48.0%であった。10~14歳が約半数を占め、昨年と比べると20歳以上が減少したが、0歳及び10~14歳の占める割合が大きく増加した。

百日咳の週別患者報告状況



百日咳の年齢層別報告数



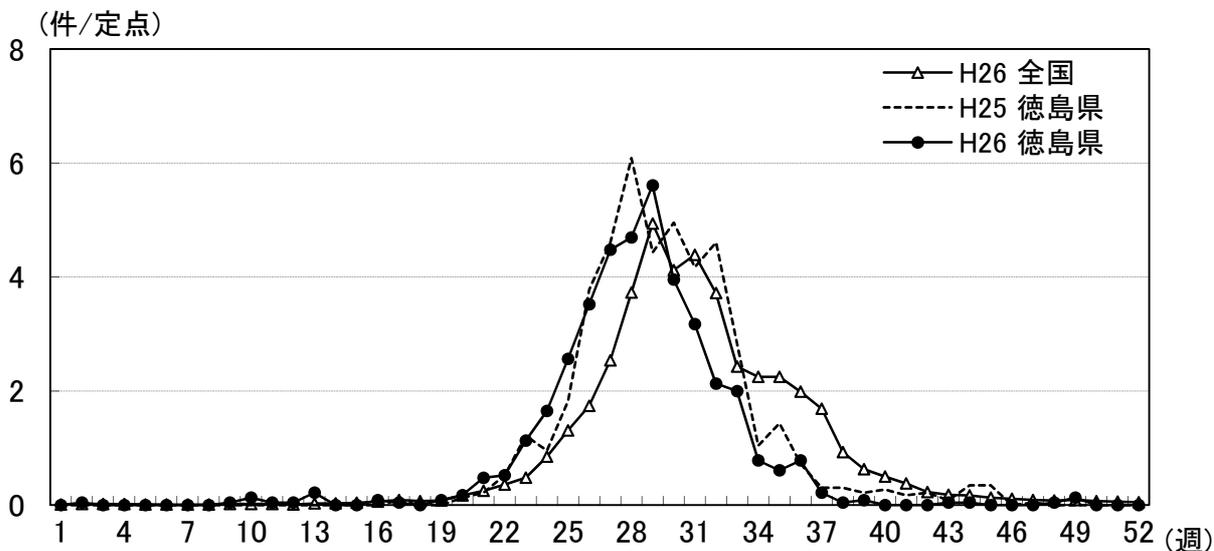
⑪ ヘルパンギーナ

年間報告数は911件と、前年(1,056件)からやや減少した。

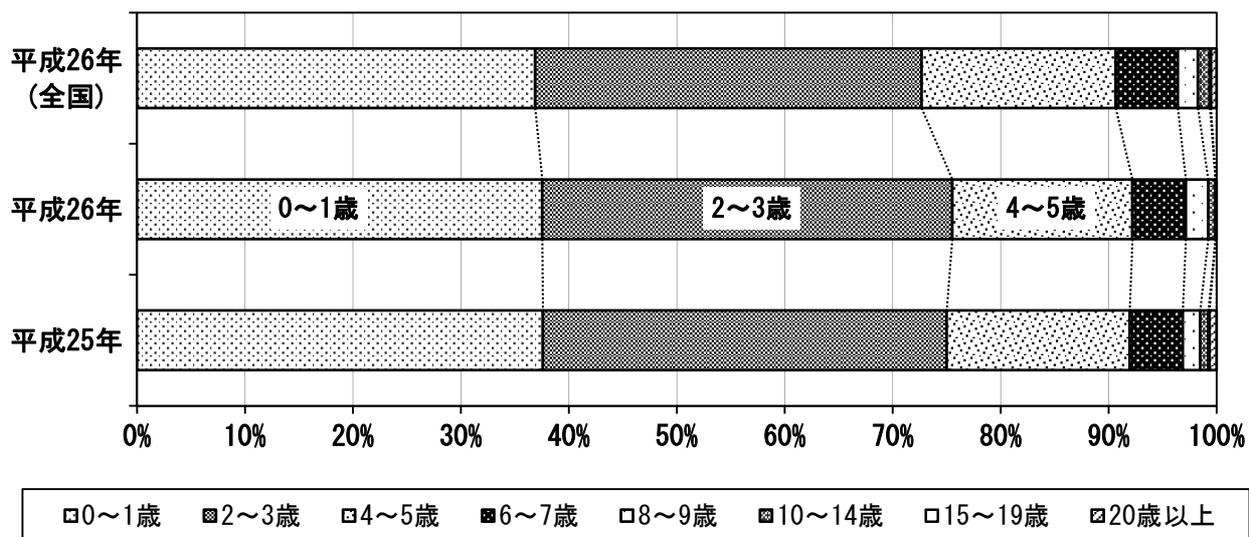
本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏季の代表的な感染症である。本年は5月中旬(第20週頃)より報告数が急増し、第28週にピーク(5.6件/定点)を示した後減少しており、前年と同様のパターンを示した。

年齢層別報告数では、1歳以下37.5%、2~3歳38.0%、4~5歳16.7%、6歳以上7.8%であり、5歳以下の乳幼児が約9割を占めた。

ヘルパンギーナの週別患者報告状況



ヘルパンギーナの年齢層別報告数

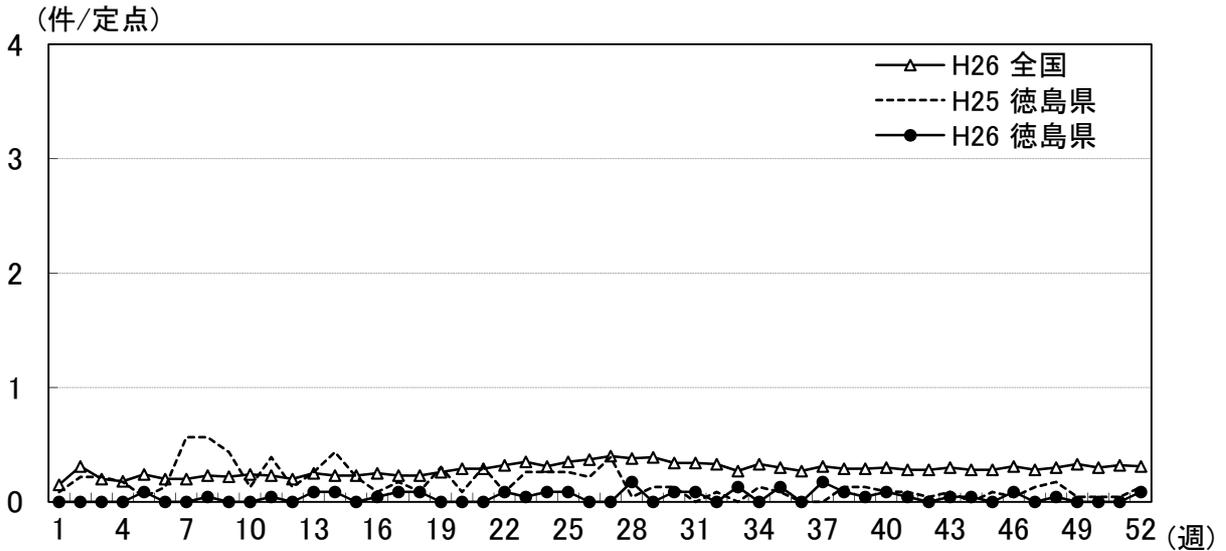


⑫ 流行性耳下腺炎

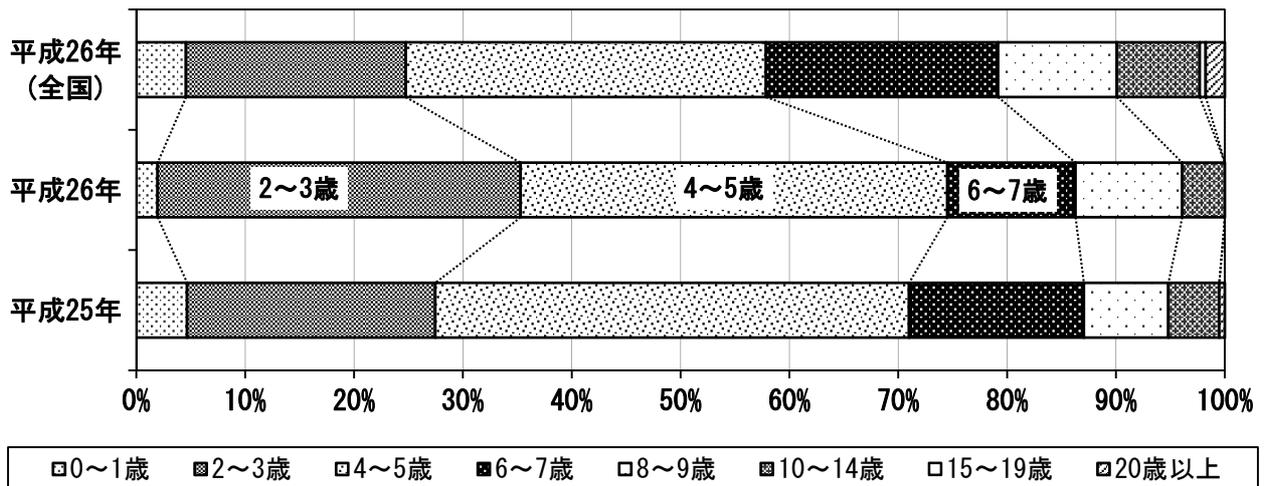
本年は51件と、前年（193件）に続いて流行は見られなかった。季節的な変動も見られず、年間を通して定点あたりの報告数は0～0.2件と低値で推移した。過去10年間では平成17,18年、平成22,23年と、数年おきに大きな流行が見られている。

年齢層別報告数では、1歳以下2.0%、2～3歳33.3%、4～5歳39.2%、6～7歳11.8%、8～9歳9.8%、10歳以上3.9%であり、例年同様に2～7歳の報告数が全体の約85%を占めた。

流行性耳下腺炎の週別患者報告状況



流行性耳下腺炎の年齢層別報告数

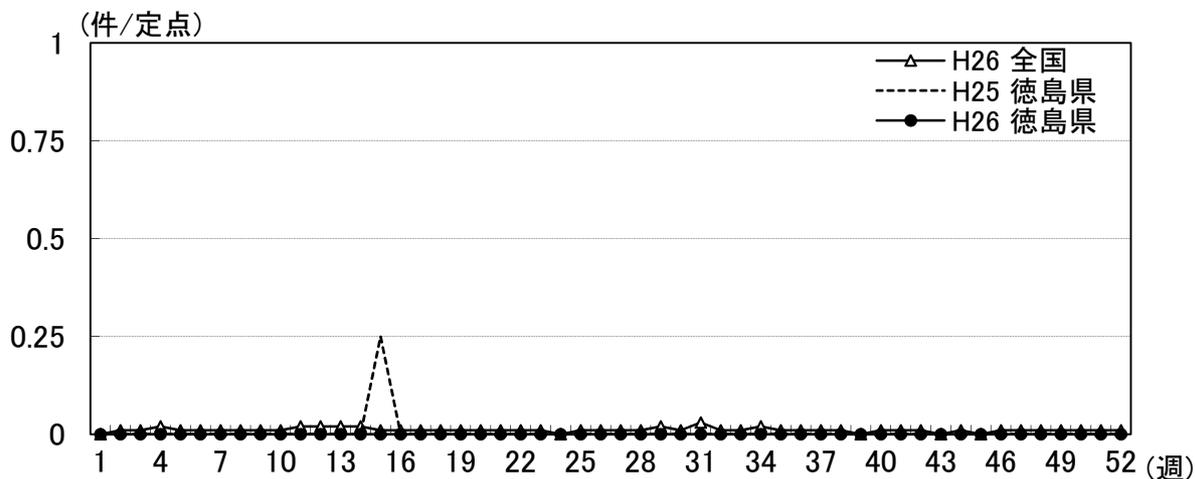


⑬ 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性が見られず報告数は低いままで微増微減を繰り返すとされる。

本年の報告はなく、過去5年間でも毎年0～2件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

急性出血性結膜炎の週別患者報告状況

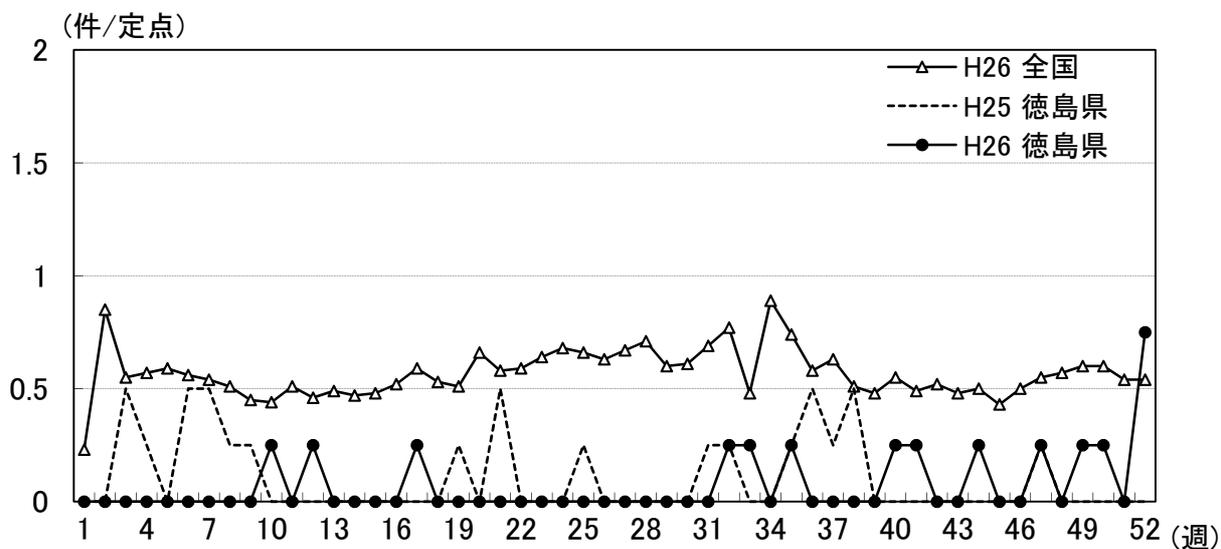


⑭ 流行性角結膜炎

年間報告数は15件であり、前年(22件)とほぼ変わらず、週あたり報告数も年間を通して0.8件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満の報告は無く、10歳代13.3%、30歳代33.3%、40歳代26.7%、50歳代6.7%、60歳代以上20.0%と、年齢による特徴は見られなかった。

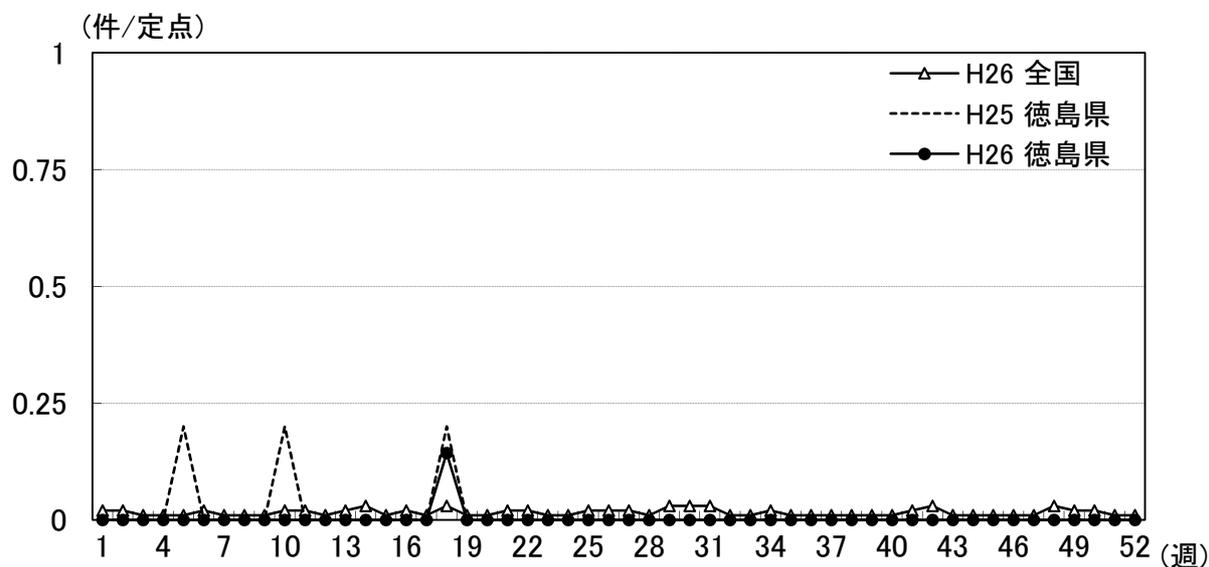
流行性角結膜炎の週別患者報告状況



⑮ 細菌性髄膜炎

年間報告数は1件（60歳代）であり、病原体は、黄色ブドウ球菌が検出されている。過去10年間に
おいては、最も報告の多かった平成22年（10件）を除くと年数件（0～5件）で推移している。

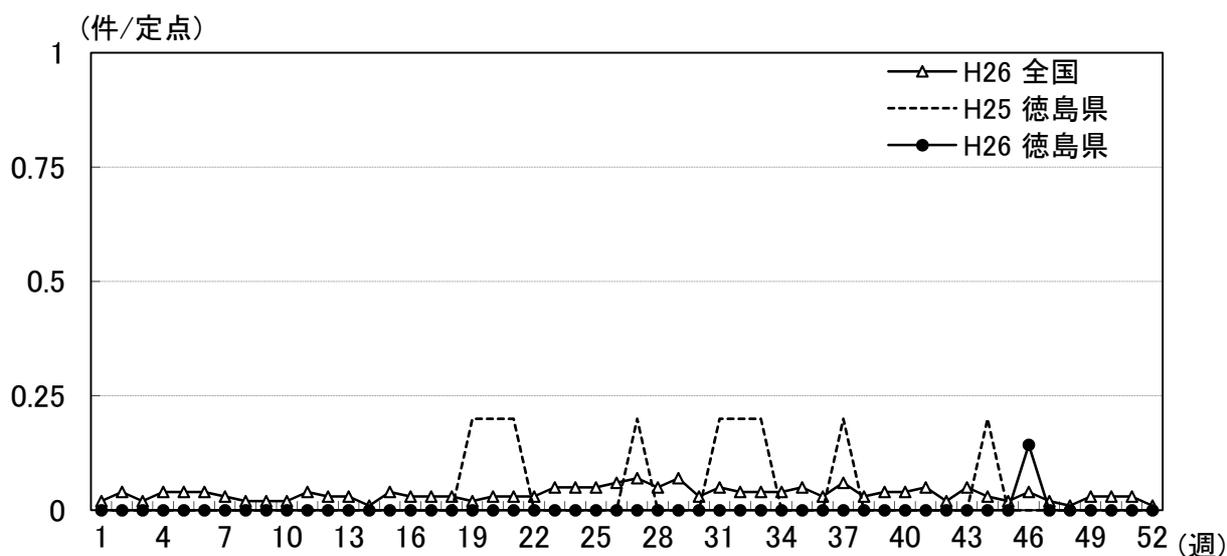
細菌性髄膜炎の週別患者報告状況



⑯ 無菌性髄膜炎

年間報告数は1件（40歳代）であり、前年（9件）、前々年（9件）から減少した。
病原体は検出されていない。

無菌性髄膜炎の週別患者報告状況

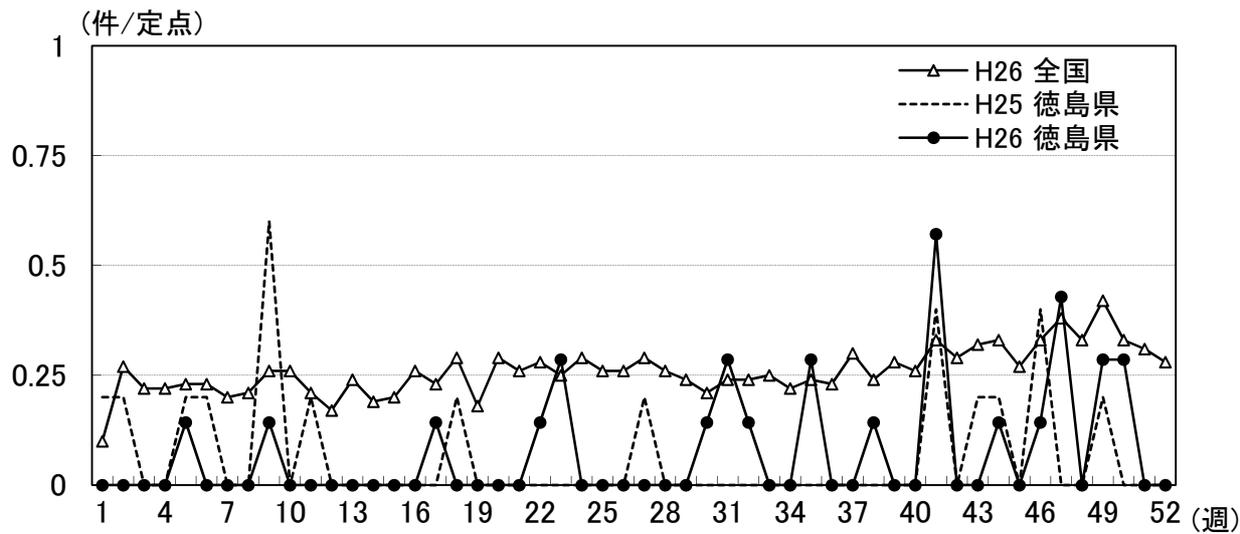


⑰ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は26件であり、前年(17件)とほぼ変わらず、過去5年間では平成23年が88件と最も多い。季節的な特徴は見られず、週あたり報告数も年間を通して0~0.6件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数では、5歳未満19.2%、5~9歳50.0%、10~14歳15.4%、20歳代以上15.4%であった。例年同様に1~9歳からの報告数が多く(約70%)を占め、幼児及び学童に多い傾向がみられた。

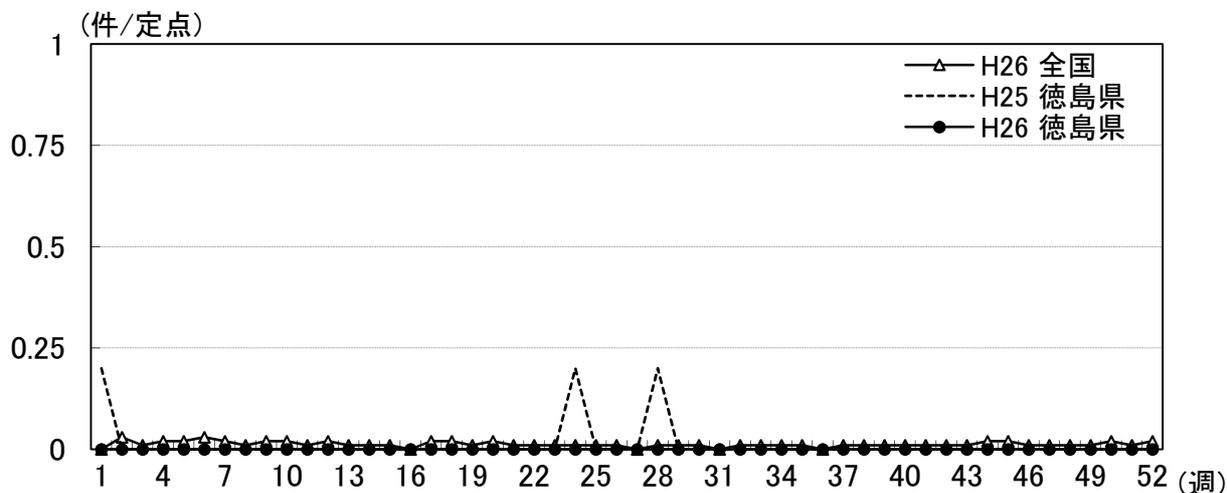
マイコプラズマ肺炎の週別患者報告状況



⑱ クラミジア肺炎

今年は報告が見られなかった。過去5年間では、平成22年に1件、平成25年に3件の報告が見られている。

クラミジア肺炎の週別患者報告状況



⑱ 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平成 25 年 10 月 14 日より基幹定点による届出対象疾患に追加された。本年は 32 件報告され、春先から初夏及び初冬に報告が多くなる季節的な特徴が見られた。

年齢層別報告数では、5 歳未満 87.5%、5～9 歳 9.4%、10～14 歳 3.1%で、5 歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

感染性胃腸炎（ロタウイルス）の週別患者報告状況

